

Ⅲ 多様な広葉樹林の育成・管理技術の開発

1. 目 的

広葉樹林の利用には、用材林や散策林など多種多様な機能が求められ、それぞれの目的に合致した広葉樹林の育成・管理技術の確立が急務となっている。本課題では、県内に広く分布するコナラ二次林を対象に、林床構成樹種（切り枝が商品となるヒサカキ）に焦点を当て、優良なヒサカキを育成するための林相改良技術を確立する。

2. 方 法

- (1) 実 施 期 間：平成12年度～16年度
- (2) 担 当 者：前 田 雄 一
- (3) 場 所：鳥取市、河原町
- (4) 材料と方法

人手の入っていない自然林（無処理区・図－1）、および中木層と低木層を処理した林（上木層は残る・図－1）、ならびに上木層・中木層・低木層を処理しギャップを形成した林（図－1）について、次の調査を実施した。

150～300㎡の調査プロットを設け、出現した木本類（樹高1.2m以上）の種名、樹高、胸高直径を計測した。その他、高木性樹種に限り、20㎡のプロットを設置して更新稚樹のサイズ、齢も調べた。3つの調査林分は、尾根部～斜面上部に位置し、土壌型はBB型、植生タイプはネジキ、シャシャンボ、アセビなどのツツジ類やソヨゴが優占していた。なお、ヒサカキについては、3,000本以上/haが確認された。

ヒサカキの調査は、①：枝枯れと葉の脱落（以下、葉落ち）、②：枝葉が水平に広がらず垂直に伸長する（以下、枝の立体化）、③：およびスズ病による葉汚れ、④：着花、の有無などを記録した。

無処理区のヒサカキを対象に、他の個体（ヒサカキ、アセビなど）との競合程度を目安として他の個体との接触の有無を記録した。そして、葉落ちや枝立体化を考慮して、枝葉の利用可能と不可能に分け、接触の有無との関係を検討した。

3. 結 果

無処理区のヒサカキは、葉落ちの多い個体が70%と多かった（図－2）。このことは、低木層（13,000本/ha）での競合が激しいものと推測された。一方、ギャップを形成した林分は、葉落ちの多い個体、花着きの多い個体が50%、枝の立体化の激しい個体が80%以上を占めた（図－2）。葉落ちや枝立体化が少ない優良なヒサカキが多かったのは、中・下層を処理した林分であった（図－2）。

無処理区のヒサカキについて、接触被害の有無と枝葉利用の可否の関係を検討したところ、接触の少ない個体に利用可能なものが多いという結果であった（図－3）。これらのことから、低木層を林相処理することの重要性が示唆された。

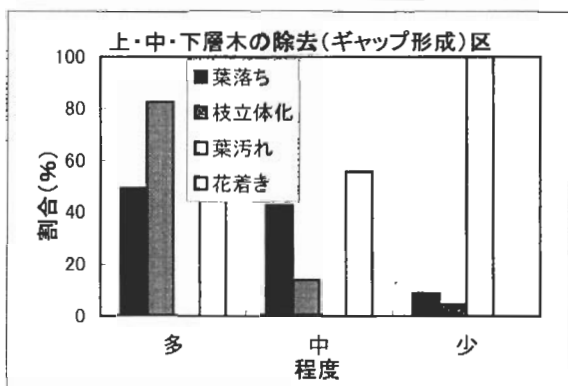
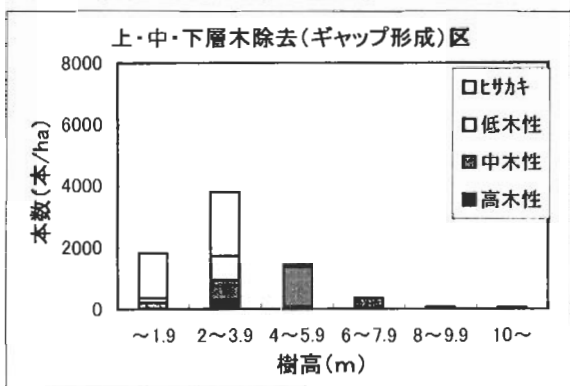
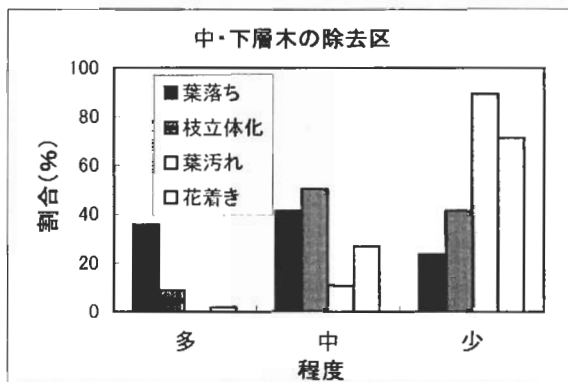
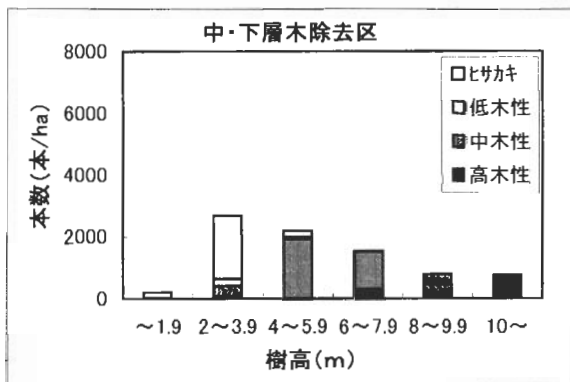
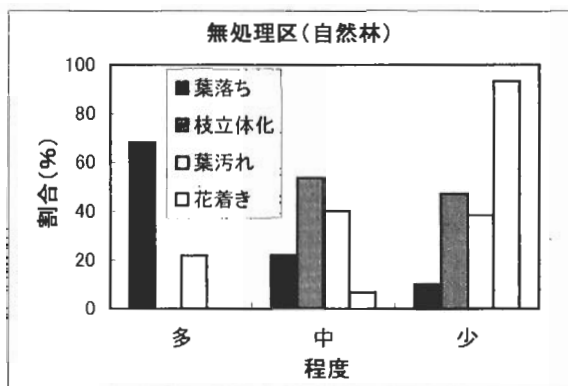
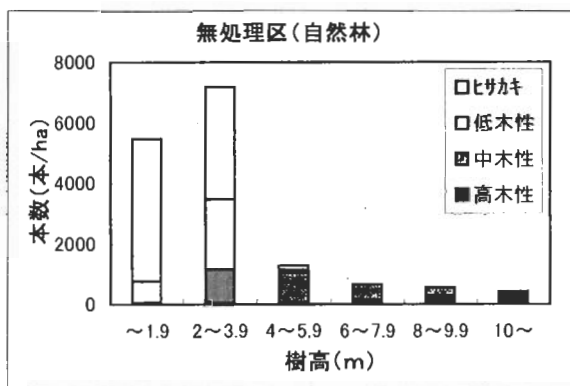


図-1 コナラ調査林の林分構造(樹高階別本数)

図-2 調査林別のヒサカキ(枝葉)の形質

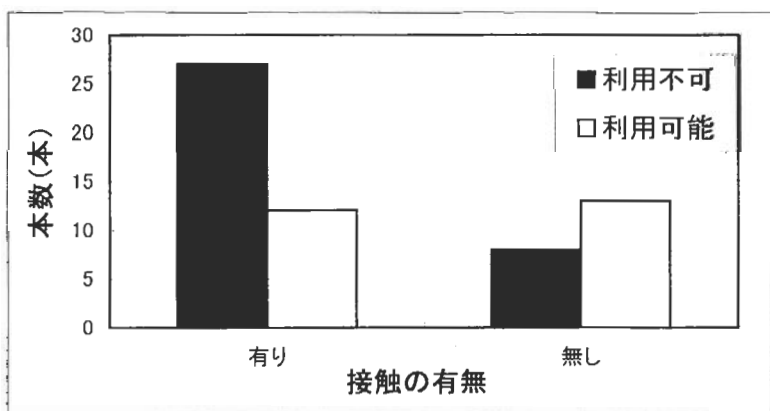


図-3 他樹種からの接触(被圧)の有無とヒサカキ(枝葉)の成績(無処理区での事例)